

KNCE NEWS

日本経団連
自然保護協議会
だより

No.38
June 2006



CONTENTS

Special Features

〈特集1／合同視察〉

世界の巨匠、
建築家・安藤忠雄氏と訪ねる
自然が生きる
アートな島、直島

3

〈特集2／スタディーツアー〉

滋賀県大津で
企画部会を開催

7

Opening Article

勿体ない考

日本電気株式会社 特別顧問 戸坂 馨

1

Features

2006年度
支援プロジェクト決定

9

〈トピックス〉

2005年度の企画部会活動を
振り返って

16

〈支援プロジェクト事業報告〉

●カンボジアにおける学校と
環境のプロジェクト
ムルップ・バイトン

19

●ロシア・ビギン川森林地帯の
住民と行う流域保全活動
国際環境NGO FoE Japan

20

Series

企業が進める自然環境教育の
現場を訪ねて〈5〉
リコーグループの「自然教室」

21

●ご寄付をいただいた皆様(法人・個人)

17

表紙写真：アムールトラなど希少種、絶滅危惧種が多数生息しているロシア・ビギン川流域で、密猟をバトロール。

写真提供：国際環境NGO FoE Japan

*本誌はすべて再生紙を利用しています。

巻頭言

勿体ない、考



日本電気株式会社
特別顧問

戸坂 馨

今年2月に日本経団連自然保護協議会と毎日新聞社の共催によるフォーラムでマータイさんにお会いする機会がありました。そこでマータイさんが「MOTTAINAI」という日本語を、世界の人々が地球環境を守るための行動を起こすきっかけになる標語として過去1年間使われてきたことを知りました。

マータイさんのお話によれば、「MOTTAINAI」を知ったのは毎日新聞の観堂義憲編集局長からだそうですが、その後、京都の住職をはじめ、たくさんの日本人からその意味するところを教わり、まさに有限な地球上の資源を、感謝の気持を持って無駄をせずに使っていくためにぴったりの言葉だと確信しているそうです。

ひるがえって、私の日常生活を振り返ってみた時、普段あまり「勿体ない」という言葉を聞かなくなっていることに気づきました。まだ小さかった頃は、何かにつけて祖母が口にしてたのを憶えていますし、ごはん粒を残せば「勿体ない」と親から怒られた記憶を持たれている方も多いと思います。

しかしながら、物余りといわれている昨今では、「勿体ない」と感じたり、思った

りすることがとても少なくなっていることに今更ながら気づいた次第です。

“勿体ない”を辞書で引きますと、

- 1) 神仏、あるいはあるべき姿に対して不都合である
- 2) 過分のことで畏れ多く身に余る
- 3) そのものの値打ちが活かされず惜しいとあります。

物の本体が失われてしまうこと、すなわち物的損失を惜しむと同時に、形のない大切な物に対する感謝の気持、さらにはそれ等を失うことに対する嘆きや、特に長い時間かけて積み重ねてきた努力等が無駄になることへの無念さを表現しています。

最近の企業経営においても3Rは環境経営の基本として定着していますが、もともと“勿体ない”は経営の基本です。すなわち、企業の持つすべての資源を無駄なく使うことは当然のことです。不良品を作らない、売れない製品を作りすぎないといった物的資源の有効活用のみならず、資金や技術を適切な時期に、適切な目的に使うこともそうですし、従業員の能力をいかに発揮させてこそ企業の活力は発揮されます。すべて“勿体ない”の実践にあるように思います。従って、企業を構成する個人個人全員が、どう“勿体ない”と感じるかがとても大切なこととなります。

昨今は国民一人ひとりが、家庭や職場、学校、地域社会等あらゆる場所で、物の豊かさだけを追求するライフスタイルを見直し、無駄を少なくし、環境に配慮した生活や事業活動を実践していくことが求められるようになりました。

NECでも全社員がより高い“勿体ない”意識を持つことを支援するためのプログラムを用意し、できるだけ多くの社員の参加を求めています。

その一つに“NEC田んぼ作りプロジェクト”があります。これは霞ヶ浦流域の自然再生に取り組んでいるアサザ基金(NPO法人)とのパートナーシップから生まれたプロジェクトで、霞ヶ浦に注ぐ小さな河川(谷津)沿いの休耕田を再生するものです。もともとアサザ基金によるアサザプロジェクトは、10年程前から霞ヶ浦流域の学校・研究者、事業者、行政が参加する市民主導型の公共事業であって、湖岸植生帯の復元、水源の山林の保全、休耕田の再生による水質浄化等を大学・企業の先端研究、地域振興、環境教育と一体化しながら霞ヶ浦流域全体で展開しています。100年後に再びトキの舞う霞ヶ浦にしようという遠大な目標を掲げています。

NECとしても、このプロジェクトのネットワーク型、循環型の市民協働プロジェクトに賛同し、単に休耕田の再生を通じての従業員環境意識啓発のみならず、ユビキタス技術による環境保全への貢献も可能と考え、共同で“NEC田んぼ作りプロジェクト”を計画・実施しました。その一環として、田んぼを取り巻く気象条件のモニタリングをするために無線センサーによる監視システムを設置しましたが、そ

の発展形として霞ヶ浦流域環境モニタリングシステムもアサザ基金と共同開発しています。これは各種無線センサーをメッシュ状に配置することにより、各種環境データを継続的に観測するシステムであり、今後の環境再生事業の方向づけに大きな貢献を期待されています。

“NEC田んぼ作りプロジェクト”は今年で3年目になります。谷津田の休耕田を再生することにより、霞ヶ浦に注ぎ込む水の水質改善に貢献すると同時に、社員の環境意識向上にも役に立っています。参加者は、田植え、草取り、稲刈り、脱穀と一連の田んぼ作りを体験することにより、自然のすばらしさや、人間がかかわることによって得られる自然の恵みを実感しています。2年間で延べ約1600名の従業員とその家族が、普段では得がたい体験をし、大変好評であります。自分が汗を流して実らせたお米を収穫してみると、やはり食べ残しては“勿体ない”という意識が自然に出てくると思います。

この田んぼで収穫されるお米は酒米なので、地元の酒造メーカーに協力していただいて日本酒を作っています。ブランド名は“^{アサザ}愛酩で笑呼”です。NECの環境経営コンセプト“ITでエコ”にちなんでつけられました。



“NEC田んぼ作りプロジェクト”の一環として、田んぼを取り巻く気象条件をモニタリングするために設置した無線センサー。



“NEC田んぼ作りプロジェクト”に参加して田植を体験する従業員とその家族。

世界の巨匠、建築家・安藤忠雄氏と訪ねる 自然が生きるアートな島、直島

日本経団連自然保護協議会企画部会は、3月24日(金)、
大久保尚武協議会会長ならびに副会長、監事の方々にもご参加いただき、合同の視察会を行いました。
世界の建築界の巨匠、安藤忠雄先生自らご案内いただき、「自然が生きるアートな島、直島」を見学。
先生の講話を伺いながら、瀬戸内海の豊かな自然環境と芸術が共生する島の姿を堪能しました。
その一方で、産業廃棄物で破壊された豊島における自然復元のあり方など、今まで体感することのなかった、
新しい形での“自然保護と風土を生かした地域づくり”の現場を訪ねることとなり、示唆を得るところの多い見学となりました。



ベネッセハウスから見る、額縁に入ったような瀬戸内海の眺望。作品：杉本博司「タイム・エクスポーズド」、撮影：安富重男、写真提供：(株)ベネッセコーポレーション

建築家安藤忠雄氏の講話から 子どもたちが感動する時と場を…

直島での安藤忠雄先生の講話は、ユーモラスな言葉の中に、現代社会に対する警鐘を交えながら感銘を呼ぶ。「未来の社会を担う子どもたちに感動を与えよう」と、建築芸術を

通じて真摯に語る安藤忠雄先生の目は凛と輝き、私たち聞く者を強く惹きつける。いつの間にか自然環境と芸術をつなぐアートな世界へと導かれていた。

以下、講話内容を要約し、本誌面に掲載させていただきますこととした。

●
今われわれがまずやらなければならないことは、子どもたちのことではないでしょうか。子どもたちは次の時代の宝です。われわれ大人が子どもをしっかりと育てる責任があります。今の子どもたちには、子どもの時にすべきことをさせていない。子どもの時にしかできないことをさせていない。そのようなことができる場所がつけられていない。親や目上に対する礼儀というものも教えられていない。今の社会の風潮のままでは、子どもが将来大人になった時が心配です。



地中美術館外観。撮影：藤塚光政、写真提供：地中美術館



作品：ウォルター・デ・マリア「タイム／タイムレス／ノー・タイム」2004、撮影：Michael Kollough、写真提供：地中美術館

小学生の時から勉強、勉強で、大学を卒業し実社会に出てきた時には、何も自分から行動することができず、朦朧とした状態になっている。

子どもの時から感動する場所を与え、泣いたり大声で叫んだりするところが必要です。私たちは、そういう場を提供する必要があります。私たちが、そういう場を提供する必要があるとの想いで、芸術という世界から取り組んできました。

ここ直島の現代アートは、自然とのつながりを保ちながら、自分自身にそれを抱え込み、感動する場を提供してくれるのです。ですから、ここのオープニングの時には、直島の子どもたちに先頭になって入ってもらいました。われわれが発信しようとする感動を、まず子どもたちに真っ先に味わってもらおうようにしました。

ここでは日本の原風景を残しています。民家も残し活用しながら、芸術家にここに来てもらって、作品を作ってもらっているのです。民家の廃屋を再利用した「家プロジェクト」は、地元の生活空間や原風景を残しながら、現代アートを通じて、そこに自然と地元の生活を感じてもらい、訪れる人たちに感動を味わってもらおうという意図なのです。

一方、隣島の豊島は、産業廃棄物の不法投棄ですっかり著名になってしまいましたが、このように破壊されてしまった瀬戸内の島々の自然を復元するために、私たちは中坊公平さんと一緒になって、2000年に「瀬戸内オリーブ基金」を設立しました。瀬戸内

の島々に100万本の苗木を植林することを目標に、一口1000円で100万人の仲間を集めよう取り組んでいます。こういった自然を甦らせ自然を保護することからも、人には大きな感動がやってきます。

そこで「瀬戸内オリーブ基金」で植樹をするほか、地元の小学生たちにドングリを拾い集めてもらい、苗木を育てることも進めています。瀬戸内の島々に皆で苗木を植え育て、緑の自然を増やせば、子どもたちの感動はいつまでも残されるに違いありません。

この直島のベネッセアートサイト一帯も、もともと緑が失われていたところでしたので、ベネッセの関係者の皆さんと一緒に、この施設周辺に、この島にふさわしい在来の樹木をたくさん植えてきました。土地がやせていただけに植林作業は大変でしたが、今ではすっかり島に溶け込んで、どれが植えた樹木が分からないくらい、しっかりと緑が復元されてきています。

こうした直島の活動のように、この瀬戸内一帯が今や芸術の海になろうとしています。高松市牟礼町に「イサムノグチ庭園美術館」が、瀬戸大橋記念公園には「東山魁夷瀬戸内美術館」が、また、しまなみ海道生口島には「平山郁夫美術館」が誕生しました。まさに瀬戸内海美術館といった広がりのある、芸術の海構想になろうとしています。

このような瀬戸内海での動きは、将来の世の中を担う子どもたちにとって、大いに感動を与える場となっていくことでしょう。



ベネッセハウスで講話する安藤忠雄氏。

瀬戸内オリーブ基金

—美しいふるさとを次の世代に—



わが国最大級の産業廃棄物の不法投棄事件として注目を集めた豊島事件を契機として、豊島および直島から瀬戸内海周辺一帯が、かつての緑あふれる豊かな島に甦るように、オリーブの木をはじめとした緑化募金運動が進められている。ここで生活する人々とともに植樹し、育て続けることによって、一人ひとりが環境を守り、自然とともに生きてきた人類の原点を見直し、次の世代のために美しいふるさとを託そうとする活動である。

●基金の問い合わせ先

瀬戸内オリーブ基金事務局
〒531-0072 大阪市北区豊崎2-5-23
安藤忠雄建築研究所内
TEL.06-6371-2227

- ・ 募金方法 原則として一口1000円で、寄付を募ります
- ・ 寄付受け入れ先 瀬戸内オリーブ基金
- ・ 振り込み先 郵便振替口座：00970-8-50658 瀬戸内オリーブ基金

自然・建築・芸術の共生

ベネッセアートサイト直島

あるがままの自然と地元の風土を生かした「ベネッセアートサイト直島」の取り組みについて、株式会社ベネッセコーポレーション直島・文化活動推進部長の笠原良二氏に案内していただいた。直島再生に向けて躍動しているその運営と活動の様子について紹介しておきたい。

※参考引用：ベネッセアートサイト直島ホームページおよびパンフレット

■ベネッセハウス

瀬戸内の自然がそのまま額縁に切り取られたとあってよい、建物を通して見えるアートな眺めに驚き感嘆させられた。92年に「自然と建築と芸術の共生」をコンセプト

として建設された中核施設「ベネッセハウス」の印象である。現代アートの展示スペースとホテル客室を備える。世界の巨匠、建築家の安藤忠雄氏が設計した本館のミュ



ベネッセハウス、撮影：山本 紉、写真提供：(株)ベネッセコーポレーション

ージウム棟は、高台に瀬戸内海を望んで建ち、外に向かって大きく開かれた構えとなっており、室内からは瀬戸内の自然がそのまま描画されているようにさえ感じる。



ベネッセアートサイト直島の海辺に据えられたモニュメント。作品：草間彌生「南瓜」。

■家プロジェクト

97年から、ベネッセハウスから2~3kmほど離れた本村地区において、廃屋となった古い民家を改修し、地元的生活空間を生かした「家プロジェクト」が始まった。ここでは、アーティストたちが古屋の空間そのものを作品化し、営まれてきた生活や伝統を生かした新たな芸術空間が生まれている。

「角屋」は、200年ほど前の古屋が改修され生まれ変わった。かつて畳の間だったと思われる部屋には水が敷かれ、まるで静かな海のようなようである。底からは発光ダイオードが、数字を捲りながら眩く光り輝いている。名づけて「Sea of Time '98」。この作品づくりには地元の人たちにも参加してもらったという。島民参加による、自然と生活とアートが融合する島づくりへの気配りが伺える。



家プロジェクト「角屋」。作品：宮島達男「Sea of Time '98 (時の海 '98)」、撮影：上野則宏、写真提供：(株)ベネッセコーポレーション

村の氏神とされている「護王神社」の改修事業もアートとしての作品の一つ。神域における地元の風習と現代アートの組み合わせだが、見ているうちに違和感がなくなり、不思議と神聖な面持ちが醸し出されてくる。



家プロジェクト「護王神社」。作品：杉本博司「Appropriate Proportion (アプロプリエイト プロポーション)」、撮影：杉本博司、写真提供：(株)ベネッセコーポレーション

かつてお寺があった場所に建てられた「南寺」の内部は、真っ暗な闇の中の芸術。かすかな光を見つけた時の、今までにはない発見の喜び。光の芸術ということだが、こうしたストーリーを考えることが芸術世界なのだろうか。



家プロジェクト「南寺」の外観と、入館を待つ大久保尚武会長と阿比留 雄副会長。

ベネッセアートサイト直島
構想のいきさつ

直島再生の構想は、1985年、瀬戸内海の島に世界中の子どもたちが集える場をつくりたいとの思いを抱いていた、福武書店(当時)創業者で社長の福武哲彦氏と、直島の南側一帯を清潔で教育的な文化エリアとして開発したいとの夢を描いていた、当時の直島町長・三宅親連氏との出会いから生まれた。

当初は福武書店の社員と子どもたちが、キャンプを行うところから活動が始まったが、89年に直島国際キャンプ場として開設され、文化村づくりへと広がっていった。

瀬戸内海の風景の中に、時間をかけてアートを作り上げていくという活動が続けられ、直島の自然や地域固有の文化の中に、現代アートや建築を整えることによって、どこにもない特別な場所と経験を創造しようとする試みであった。

やがて、ベネッセハウス、家プロジェクトへと広がり、2004年にはプロジェクトの総称となる「ベネッセアートサイト直島」となって活動が続けられている。

知性と感性の刺激を体感する
地中美術館

地中美術館は、04年に「自然と人間を考える場所」として、直島福武美術館財団により開設された。世界の建築家・安藤忠雄氏と現代美術作家とがコラボレーションして作り上げた、地中に展開する芸術の空間である。アメリカの現代美術作家のウォルター・デ・マリア、ジェームズ・タレルが直島のために現代アートを制作、自然の光が建物と一体的となってアートの中に取り込まれている。印象派のクロード・モネの最高傑作

「睡蓮」の展示とともに、建築空間そのものが芸術となった美術館であり、中に入った人それぞれに感動を抱かせ、アートな世界に導かれる。

地中美術館のリーフレットには、次のように記されている。

“自然と人間との関係を考える美術館。瀬戸内の静かな自然が発するリズムと、その場にもっともふさわしいアートと空間の中で、人間の知性と感性の刺激を体感する場所。”



地図：香川県直島環境センター発行パンフレットより。

豊島の廃棄物処理で瀬戸内の再生を目指す エコアイランド直島

■直島のもう一つの顔

芸術・文化の発信基地という直島のもう一つの顔がエコの島である。ベネッセハウス地区の反対側に、1917(大正6)年創業以来、島の発展を支えてきた三菱マテリアル株式会社直島精錬所がある。ここでは、これまで培ってきた銅精錬技術や施設を活用し、有価金属のリサイクルなどの循環型資源回収事業を通じたエコタウン構想を推進している。また、その構内には、豊島で不法投棄された産業廃棄物を中間処理する香川県直島環境センターが置かれ、2003年9月から稼働を始めている。

■豊島産業廃棄物中間処理施設(香川県直島環境センター)を訪ねて

まず、センターが装備する、最新の回転式表面熔融炉やロータリーキルン炉、それら熔融処理に伴って発生する飛灰、スラグ等の副産物を再資源化し、有効利用する過程等を見学。さらに、県職員の方からの現況報告や豊島事件を記録したビデオによる説明を受けたわれわれ一行の眼前には、隣島・豊島の美しい海に浮かぶ、静かで、たおやかな稜線をもつ姿が望めた。

現在、直島と豊島の間には廃棄物を海上輸送する専用船が日に2便フル稼働しているが、約60万tの廃棄物、汚染土壌の処理を完了させるには、約10年の年月と約490億円といった多大な原状回復費用が必要とのことであった。わが国最大級の産廃不法投棄事件として注目を集め、ゴミの島、毒の

島として全国に知られる存在となった豊島。しかし、帰路、船上より間近に望んだ事件現場、水ヶ浦地区の痛々しい姿を除けば、豊島は自然豊かで、戦後、社会運動家が理想郷建設を夢見た地でもあり、今日、福祉の島としての発展を目指している現実の姿を垣間見ることができた。

■循環型社会構築の契機となった豊島事件

豊島事件とは、悪質な事業者によって、島西端の国立公園内、水ヶ浦地区に、13年間にわたって有害産業廃棄物が不法に野焼きされ、埋め立てられた事件である。90年、警察の摘発を受け、操業停止、事業者有罪となったが、残された約60万tの有害廃棄物の処理を巡って住民が行政と争い、00年6月の公害調停成立を経て、現在の処理スキームにつながった。経済優先社会のいわゆるゴミ問題を世に問い、わが国がより環境負荷の少ない循環型社会を目指していくきっかけとなった事件であった。

今日、産業界では、本格的な循環型社会を実現すべく、自主的に3R、とりわけリサイクルを積極的に進め、できるだけ廃棄物を最終処分場に回さないように努力している。これらの取り組みは、順調に進展しており、産業界全体の産業廃棄物最終処分量を2010年には1990年実績の75%に削減するとの目標を、02年以降3年連続で前倒し達成している。

不法投棄については、新たに確認される



遮水壁に囲まれた豊島の産業廃棄物不法投棄現場(水ヶ浦)。



直島の三菱マテリアル(株)直島精錬所の敷地内に整備された中間処理施設。写真：香川県直島環境センター発行パンフレットより。

のは1000件程度、40万tと減少傾向にはあるが、いまだ残存数量は約1100万tにも上る。国の不法投棄撲滅アクションプランなど、罰則や規制の厳格化と併せ、真の循環型社会実現に向けた歩みを、国、地方自治体、住民、産業界一体となって、一步一步着実に進めていくことの重要性を痛感させられる訪問であった。



●合同視察会参加者

大久保尚武 日本経団連自然保護協議会 会長、積水化学工業株式会社 社長
阿比留 雄 同 副会長、日本原子力発電株式会社 相談役
村上仁志 同 監事、住友信託銀行株式会社 特別顧問
渡邊浩之 同 副会長、トヨタ自動車株式会社 技監
戸坂 馨 同 副会長、日本電気株式会社 特別顧問
茂木賢三郎 キッコーマン株式会社 副会長
茂木瓊子 同 令夫人

このほか、企画部会委員10名、事務局3名の構成で、総勢20名が参加(敬称略)。



小野了代理事長(写真右端)とNICCOのボランティアの皆さん。

これまでの経緯、背景

NICCOはもともとヨルダンやイラン、ベトナムなど、海外でのパーマカルチャーに基づいた環境保全型有機農法の導入による農林業支援や医療公衆衛生、災害発生時の緊急援助などを幅広く手がけてきた団体である。インド洋大津波やパキスタンでの大地震による災害発生時の素早い救援活動は記憶に新しい。

一方、国内では、この伊香立におけるプロジェクトが初めてであった。この活動を始めるきっかけは、京都市内から程近いところに荒れた山林が放置されていたことである。現場の山林には、谷間に大量の産業廃棄物が捨てられ、辺りを埋め尽くしていた。また、人手が入らない山林は荒れ果て、台風による倒木が放置されるなど、かなり痛んだ状態だった。このような荒れた里山の風景は今では全国で見られるようになり、大きな問題となっている。産廃問題は最終的に裁判で勝訴となったが、残土の処分など修復は思うように進まず、何ともならない状態にあった。

NICCOは、ここを元通りの元気な山林に戻していく作業を通して、人材育成や環境教育、地域と都市住民との協働ができないかと考えた。海外でのプロジェクトを指導できる人材を育てることや環境教育は重要な課題である。また、京都や大津など都市から近いという点で、都市住民との関係も考慮した活動ができるいい機会でもあった。

特集2

スタディーツアー

- 参加者
- | | |
|--------------|----------------------------|
| トヨタ自動車株式会社 | 環境部 企画グループ担当部長 西堤 徹 |
| 株式会社損害保険ジャパン | コーポレートコミュニケーション企画部 課長 富沢泰夫 |
| 住友林業株式会社 | 環境経営部長、チームマネージャー 小林秋道 |
| 日本原子力発電株式会社 | 社長室 副室長 島守哲哉 |
| 住友信託銀行株式会社 | 企画部 社会活動統括室審議役 石原 博 |
| 積水化学工業株式会社 | 環境経営部 環境企画グループ 担当部長 柳井俊郎 |
| 〈事務局〉 | |
| 日本経団連自然保護協議会 | 事務局長 末松哲治 |
| 日本経団連自然保護協議会 | 部長 谷口雅保 |
| (敬称略) | |

企画部会は、直島に引き続き、

3月25日(土)に国内の支援プロジェクトである(社)日本国際民間協力会(以下、NICCO)の活動地を訪問した。

滋賀県大津市伊香立にある当サイトは、京都からJR湖西線に乗り換え、和邇(わに)駅で下車、のどかな風景が広がる場所である。

筆者は2004年に本事業が始まった当初にこの地を訪れる機会があった。

すべてがこれから始まるという中で、理事長の小野了代さんから事業の将来計画について熱心なお話を伺ったことを覚えている。「荒れた山林の修復」「人材の育成」「水問題の重要性と都市住民の参加」の3点がキーワードであった。

その後の事業の進展を、企画部会のメンバーとともに確かめてみた。

滋賀県大津で 企画部会を開催

サイトの整備

久しぶりに訪れたサイトは整地が進み、随分と変わっていた。畑が作られ、周囲には植樹がされ、防獣柵も設けられていた。この辺りは、冬場でもイノシシやシカが山から出て来て、畑を荒らしていくこともあるとのことである。

訪れた私たちを、NICCOのインターン生で、このプロジェクトのリーダーである徳竹沙織さんを中心に、学生ボランティアの面々、シルバーボランティアで主に木工技術を指導されている福田 新さん、土壌改良や農作業の指導をされている京都大学・西村和雄教授らが出迎えてくださった。

乱雑に放置されていた丸太が今ではきれいに整頓され、傍らではそれらを使ってテーブルなどが作られている。ジャガイモの植え付け準備も始められ、ボランティアたちは忙しそうに手分けして、畝づくりや種芋の準備、水の準備などを行っていた。現在、ボランティアの登録は二十数名。インターネットで初めて集まったメンバーから常連まで、自由参加で週2回程度活動しているとのことである。

畑の周りは設備も整ってきている様子で、作業小屋ができ上がり、隅の方にはエコサントイレが設置されていた。このトイレは、ベトナムで行っているパーマカルチャーのプロジェクトにおいて、地域住民の衛生管理を推進するために普及させているものと同タイプ。環境衛生と尿便の堆肥利用を容易にするための工夫がされており、臭いが少なく、尿は薄めて肥料、便は堆肥として利用できる優れものだ。その横には雨水浄化槽がある。雨水を貯め、ドラム缶を利用して浄化を行うが、配管もでき上がり、炊事や洗い物に利用できるよう、工夫してあった。この2

年の間に、着々と整備されつつあるとの印象を受けた。

現場では、小野了代理事長からメンバーの紹介や活動の進捗報告などがあり、その後、私たちもボランティアの方々とともにジャガイモの作付けを体験。へっぴり腰で畝づくりを手伝ったり、肥料を撒くなど、2畝に作付けを行った。ボランティアの皆さんは、先生方のご指導を素直に聞き、楽しみながらも真剣に取り組んでいる様子であった。

このように野菜の栽培ができるまでには、土壌の改良などが地道に行われてきた。大手建設会社や自治体の協力で客土したり、クローバーなどのマメ科の植物を育てて土壌中の窒素分を固定し、土に力をつける作業を行ってきた。土壌や水質、植生に関する調査を継続しているが、野菜栽培物については支障のない状態になっているとのことである。

西村先生のお話によると、最近、やせていた土地に変化が見られるようになってきており、植生も変わり、周囲に植えてある杉の幹や枝の伸び方が変わってきたとのことである。確かに、畑の脇に植えてある木を見ると、年々に成長する間隔が大きくなってきているのが分かる。「土の向かっていく方向を見極め、耕作などを通して変化を加速していくことが重要」とのことである。

インターン制度による人材育成

このプロジェクトのもう一つの重要なテーマは人材の育成である。海外で進めているプロジェクトのリーダーを育成するための実践の場として、また途上国支援のためのモデルづくりを目的に、このサイトを活用したいとの狙いである。

ここでは徳竹さんを中心に、先生方のご

指導でパーマカルチャーの手法を実践。それらに不可欠な等高線測量、水路掘削などの技術を、実際の活動で習得している。事務所では、農業、林業、測量などの専門家を招いての技術講習会を定期的に関開くなど、必要な知識の習得も行われているようだ。

国際的に通用する若者を育成することは重要で、派遣現地ではいろいろな技術が求められる。プロジェクトによっては、専門家も派遣されることはあるが、プロジェクトコーディネーターが中心となって現地の人たちを指導しなくてはいけないからである。ともするとOJT方式で技術を身につけていくというやり方が多いなか、NICCOが行っているこの活動はとても意義深い。ここで育った人材が、海外の活動地でプロジェクトリーダーとして活躍する日がくることが大いに期待される。

所感

ボランティアの方々には、小野理事長に叱咤激励されながら、プロジェクトの進捗のために励んでいる。しかも、彼ら自身、自らの成長を楽しんでいる風に見える。現場は、着実に活気を取り戻しつつある。

また、水の問題は川上と川下の住民同士の連携が必要となる。都市の住民を巻き込んだ形の活動が大切で、地域住民と一緒に収穫祭を行うなど、この面でも、少しずつ交流が始まっているようだ。

帰りに立ち寄った京都市内の事務所は町屋造りの由緒ある家屋にあるが、ちょうど活動資金を集めるためのチャリティーオークションの品々が準備されていた。京都市民の応援を受けて、力強く、自立的に頑張っている皆さんの様子を拝見することができた。

(事務局 谷口記)



ジャガイモの作付けを手伝う企画部会委員。



小野了代理事長、榎木捨蔵理事らと歓談する企画部会委員。



設置されたエコサントイレ。

2006年度
**支援プロジェクト
決定**
2006

去る3月17日、公益信託日本経団連自然保護基金・第13回運営委員会が経団連会館で開催され、2006年度の支援プロジェクトが決定されました。

今年度の申込件数は119件で、そのうち63件(海外案件47件、国内案件16件)に対して支援が行われることになりました。なお、昨年度の支援件数は60件(海外案件46件、国内案件14件)でした。

支援総額は1億6000万円(昨年度は1億5000万円)で、そのうち海外分は1億2327万円(昨年度は1億1773万円)、国内分は3673万円(昨年度は3227万円)という結果になりました。なお、2005年度の募金総額は1億8439万円でした。

以下に今年度の支援プロジェクトをご紹介します。

インドネシア

1. 西ジャワ州における自然資源の共同管理を基礎とする持続可能な生計支援

西ジャワ州サラック国立公園周辺は熱帯林や希少生物の宝庫である。しかし近年、乱開発により資源が損なわれつつある。農民間の伝統的知識を共有・利用し、豊かな自然環境を保全しつつ、住民の生計向上を図る。

[(社)日本環境教育フォーラム/日本]
<http://www.jecf.or.jp/>

2. インドネシア・東カリマンタン州のオランウータン保護調査プロジェクト

東カリマンタン州クタイ国立公園一帯の低地熱帯林地域は、かつて森林火災の影響を大きく受けた。この地域の野生オランウータンの社会・生態学的研究を継続し、森林保全のためのパトロールを行う。また石炭開発の拡張が進む北部地帯を、国立公園化するよう提唱している。

[日本・インドネシア オランウータン保護調査委員会/日本]
<http://orangutan.id.infoseek.co.jp/>

3. インドネシア熱帯林の持続可能な利用のための関係者間の連携強化プロジェクト

インドネシアは世界第3位の熱帯林を有しているが、年間1%という高率でその破壊が進んでいる。さまざまな関係者からなるワークショップを開催、違法取引の実態を把握し、解決策と行動計画を策定する。また、違法木材輸入排除のため、日本での法的規制の提案作成を行う。

[トラフィックイーストアジアジャパン/日本]
<http://www.trafficj.org/>

4. ジャカルタにおける湿地保全のための基盤整備

ジャカルタ北部海岸域は希少鳥類の生息地であるだけでなく、ジャカルタ市民の憩いの場であり、洪水を防ぐバッファゾーンでもある。しかし、地域住民や観光客により廃棄物や汚水が流され、環境は悪化している。住民たちに環境教育を行うことで湿地の環境保全を進めていく。

[Fauna & Flora International_Indonesia Programme/インドネシア]
<http://www.fauna-flora.org/>



Gunung Palung 国立公園におけるオランウータン保全活動/Fauna & Flora International_Indonesia Programme. Didik/FFI for the photo credit

5. Gunung Palung国立公園における住民参加によるオランウータン保全のための監視強化

Gunung Palung国立公園はオランウータン保全の場所として最重要地域である。しかし、違法伐採や密猟などで5万頭まで減少し、危機に瀕している。政府、国立公園と協力してパトロール隊を結成し、訓練を行い、密猟者の取り締まりを行うとともに、関係者の意識向上を図る。

[Fauna & Flora International_Indonesia Programme/インドネシア]
<http://www.fauna-flora.org/>

6. インドネシア、ランブン州セガマ・クチル島における絶滅に瀕したタイマイの保護活動

スマトラ島東方約30キロに位置するセガマ・クチル島は、絶滅危惧種のタイマイが年間200巣ほど産卵しているが、周辺の漁師により大半が採取されてきた。監視小屋と監視人を配置し、卵の孵化調査・標識調査に加え、卵移植や買い上げなど、実質的な保護システムを構築する。

[インドネシアウミガメ研究センター/インドネシア]
<http://www.seaturtle.or.id/>

7. 北スマトラDeli Serdang地方の渡り鳥繁殖地における マングローブ再生

北スマトラ東海岸地域は、マングローブ林と渡り鳥、水鳥の宝庫だが、エビ養殖や無秩序な観光開発により衰退の危機にある。パードライフ・インターナショナルからIBA指定を受けている同海岸地域の周辺住民への環境教育を含め、マングローブ林再生と繁殖地の確保に取り組む。

[Yayasan Akasia Indonesia / インドネシア]

タイ

8. ナコンシタマラート地区「緑の絨毯作戦」第三期計画

タイのマングローブ林は、エビ養殖池への転換のための伐採などで、この30年間で半減。再生に向け、98年から開始された植林事業は毎年100haを実施、06年からの第三期計画で当初予定の1000haを達成。さらに、マングローブのCO₂固定能力の高さを実証し、地球温暖化防止にも貢献する。

[マングローブ植林大作戦連絡協議会 / 日本]

<http://www.allies.or.jp/mangrove/>

9. タイ北部における、環境センターを中心とする 環境教育の実施と森林保全

北部タイ地域は、山岳民族など生活の中で山とのかかわりが深い。焼畑や山火事などにより森林面積の減少が著しく、昨年はこの地域一帯が大洪水の被害に見舞われた。この山岳民族の状況を打開するため、子どもたちを対象とした環境教育と植林活動を優先課題として取り組む。

[(財)オイスカ / 日本]

<http://www.oisca.org/>

10. タイ西部森林地帯における野生ゾウの保護

タイ西部Salak Pra保護区はモンスーンの落葉・常緑混交林地域で、120頭の野生ゾウが生息している。未だ保護地域となっていないこの地域の森林が失われると野生ゾウは激減する。タイ全土には1500頭が生息するが、現地の野生ゾウのモニタリングと地元民の意識啓発を推進し、緑の回廊保護体制を整える。

[Zoological Society of London / 英国]

<http://www.zsl.org/>

11. タイ北部高原地域における子どもたちへの環境教育

チェンマイ北西約150kmの山間にあるMae Daed, Chaem LuangおよびWat Chan地区で、ランブーン県での環境教育センター立ち上げの経験を活かし、持続可能な自然資源管理に向け、原住民の伝統的な知識の復活や環境教育等の指導者養成を行う。

[Raks Thai Foundation / タイ]

<http://www.raksthai.org/>

ベトナム

12. ベトナム・ハモン族の地域基盤となる森林保護と アグロフォレストリーによる生活環境改善プログラム

ソララ省には、最貧コミュニティの一つハモン族270家族が居住。無計画な伐採で森林が減少しており、森林保護教育と生活環境改善の農業知識が必要とされる。アグロフォレストリーや植林用在来種苗木の育成、傾斜地農業による土壌浸食防止、竹炭による水浄化法など、技術導入を推進する。

[(特)ICA文化事業協会 / 日本]

<http://www.icajapan.org/>

13. ベトナム北西部山岳地域住民参加型農村開発・環境保全事業

ベトナムは70年代から行われた大規模な商業伐採により、森林面積は29%まで低下した。ホアビン省タンラック郡マンドゥックで、環境教育を通じ、自然資源の重要性を再認識させるとともに、持続的に活用していくための具体的な方策を実践する。

[(特)日本国際ボランティアセンター / 日本]

<http://www.ngo-jvc.net/>

カンボジア

14. カンボジア北部オンスール郡における自然資源の再生・ 有効利用を目指した持続的農業促進活動

オンスール郡では、食物や薪などを森から得ていたが、人口増加や内戦による混乱等で森林資源が減少。自然資源の再生・有効利用が不可欠であり、持続的農業に関する研修、児童への環境教育、植林活動などを実施する。

[(特)日本国際ボランティアセンター / 日本]

<http://www.ngo-jvc.net/>

15. カンボジアにおける学校と環境のプロジェクト

キリロム国立公園は、周辺地域での森林伐採や環境悪化から、生物多様性保全の最後の拠点とされ、周辺住民への環境教育とエコ・ツーリズムによる保全費用の確保が急務。98年からの学校エコクラブの結成、環境教育マニュアル作成に引き続き、04年には環境センターが完成、活動の充実を目指す。

[Mlup Baitong / カンボジア]

<http://www.mlup.org/>

マレーシア

16. マレーシア・サラワク州における 熱帯雨林再生のための植林活動

ボルネオ島北部のサラワク州は生物多様性の宝庫として知られているが、近年、伐採や山火事による熱帯林破壊による環境悪化が深刻。同州のセリアン地区アベン保護林において、複合森林の試験的導入や25haの植林・育林、周辺住民への環境教育、生活環境調査等を行う。

[(社)日本マレーシア協会 / 日本]

<http://www.jma-wawasan.com/>

17. マレーシアにおける熱帯林再生・植林プロジェクト

サラワク州ピンツルの低地熱帯雨林域は、焼畑、木材伐採、大規模アブラヤシ・プランテーションが展開され、広大な森林と生物多様性が急速に消失。マレーシア農科大学、サラワク大学の協力で、植物社会学的調査により現存植生や潜在自然植生を判定し、植林で生態系回復を図る。

[(財)国際生態学センター / 日本]

<http://www.jise.or.jp/>

ラオス

18. ラオスにおける環境番組の制作と環境教育への利用

ラオスでは、経済開発などのために川や森などの資源劣化が見られ、環境問題と持続的な自然資源管理に重点を置いた情報収集が緊急な課題。地元テレビ局を通じた環境番組を制作し、その放映とビデオ化により、環境教育機関に情報を提供する。

[(特)メコン・ウォッチ / 日本]

<http://www.mekongwatch.org/>



MandalayのYadanabon動物園に設けられたカメの救護センター／Conservation International

ミャンマー

19. ミャンマー北部における絶滅危惧種カメの保全プロジェクト

ミャンマーには絶滅危惧、固有種のカメが多数生息する。これらを絶滅から守るため、大学生、地域住民に対して適切な保護活動の実施訓練を行い、仏教層をも巻き込んで寺院境内での救済、繁殖支援活動等を行う。同時に地域住民への参加型啓発活動を行う。

[Conservation International／米国]

<http://www.conservation.or.jp/>

中国

20. 呼倫貝爾地域植林プロジェクト事業

呼倫貝爾(ホロンバイル)市は内蒙古自治区の最北端にあり、草原退化、土壌流失などにより生態環境は悪化、森林率は9%まで低下した。植林活動と環境教育を継続し、砂漠化防止に協力する。本年度は65haの植林を行い、併せて適地・適木や活着率向上等の研究を行う。

[(特)呼倫貝爾地域緑化推進協会／日本]

http://www2.u-netsurf.ne.jp/~s-juku/ho_greening_top.html

21. 雲南省「三江併流」世界自然遺産における生物多様性の保全事業

長江、メコン、サロウインの三河川が並行して流れる雲南省西北部「三江併流」地域は、世界自然遺産に指定され、希少動植物の宝庫となっているが、急速な自然破壊が懸念される。生物多様性の回復に向け、現地調査センターの設置や地域住民の環境意識を高める活動を行う。

[東京大学緑色文化国際交流促進会／日本]

22. 多様性のある森林再生のモデルづくり第三期

大同は北京の水源だが、周辺の黄土高原は土壌浸食と砂漠化が進行し、緑化が急務。多様性ある森林再生を目指し、十年余で1578万本の苗木を4768haに植林するとともに、地元農村の環境とマッチした生活向上のモデル構築を目指し、換金作物としての果樹植林等に尽力。

[(認特)緑の地球ネットワーク／日本]

<http://homepage3.nifty.com/gentree/>

23. 内モンゴル阿拉善地域における生物多様性保全と草原再生のモデル事業

内モンゴル自治区は、年間降水量が150mm以下で、植生比率が2%しかない。砂漠化が進む草原地帯であり、放牧禁止区域となっている。スナナツメ、エンジュ、自生種灌木など6万本の植林を行い、草原の再生と砂漠化防止に寄与するとともに、小学生を対象とする環境教育と住民参加の環境保護意識の向上に資する。

[(特)世界の砂漠を緑で包む会／日本]

<http://www8.plala.or.jp/tutumkai/>

インド

24. インドOrissa地方Rushikulya Estuary海岸地域の自然環境・生物多様性保全と環境教育

絶滅危惧種のヒメウミガメが15万匹も産卵のため上陸するRushikulya Estuary海岸は、世界第二位の集団繁殖地だが、違法な漁獲行為等によって、幼体の生存率は1000分の1を割り込んでいる。ウミガメ保護やマングローブ林復元の重要性に関する環境教育を、地元住民、漁業関係者等に徹底する活動を行う。

[Pallishree／インド]

<http://www.pallishreeindia.org/>

バングラデシュ

25. バングラデシュ海岸域の渡り鳥、特にヘラシギに焦点を当てた保全とモニタリング活動

中部海岸域のNoakhali干潟周辺は渡り鳥の重要な航路が交わる所で、20万羽が越冬する。絶滅危惧種のヘラシギに焦点を当て、住民の意識啓発、モニターや保全のための環境をつくるなどの保全活動を行う。

[Nature Conservation Management (NACOM)／バングラデシュ]

26. バングラデシュ南西部Sundarbanのマングローブ林の再生と生物多様性の保全

ガンジス河口、6017km²に及ぶサンダーバーン保護林の約60%を占めるマングローブ林は、多様な動植物の生息地であり、世界自然遺産の登録地。しかし、海面の上昇や塩分の増加、開発による劣化が著しく、植林による再生が急務。地元住民や学生を巻き込んだ保全活動を行う。

[Centre for Coastal Environmental Conservation／バングラデシュ]

27. バングラデシュのココス・バザール海岸におけるウミガメ調査と保護

チッタゴン近郊のココス・バザール海岸は、110kmに及ぶ砂浜を持つ世界屈指の美しい海岸で、ウミガメや渡り鳥などの生息地となっているが、乱開発等により環境が悪化。地域住民の参加を得て、ウミガメの個体数の保全を目的に、産卵巣の保護、海浜環境の浄化等の活動を行う。

[MARINELIFE ALLIANCE／バングラデシュ]

<http://www.marinelifealliance.org/>

ネパール

28. ネパール・バルワ村のコミュニティフォレスト指導事業

カトマンズ近郊のバルワ村は、急傾斜の山間部に位置し、長年にわたる森林伐採で林地の崩壊が随所に見られる。現地での技術指導や森林担当者の招聘事業を通じ、熊野地方の伝統的な森林文化を伝え、育林・造林技術の移転により、現地に即した森林文化の醸成と人材育成に努める。

[熊野森林文化国際交流会／日本]

<http://www1.ocn.nc.jp/~kifajap/>

29. 東Himal地方の回廊保全事業

—Makalu/Kanchenjunga山系保護区に介在する回廊の住民管理による保全活動—

東Himal地方は、回廊として世界的に価値が高い景観を誇るが、未だ保護区となっていない。そこで、保全活動に向けたモデルコミュニティづくりを推進し、生物多様性ホットスポットの生息調査(レッドパンダ、ユキヒョウ)や、その保全に効果的な伝統的土地利用社会の調査を行う。

[The Mountain Institute／米国]

<http://www.mountain.org/>

30. ネパールの湿地における文化的価値の研究と賢明な利用

ネパールの湿地保全、賢明な利用のために、伝統や慣習など文化的価値に関する知識や賢慮を見直し、活用する。そのためにワークショップを開催し、課題に優先順位を付ける。また、村落地域でのフィールド研究を実施し、成果を広めていく。

[Forum for Ecosystem Management／ネパール]

ロシア

31. ビギン川森林地帯の住民と行う流域保全活動

ビギン川流域には広大な森林が残っており、アムールトラなど希少種、絶滅危惧種が多数生息している。しかし密猟、不法伐採などが生態系に悪影響を及ぼしている。住民とともに環境教育や監視活動、エコツーリズムの基盤づくりなどを実施し、持続可能な自然利用を促進する。

[国際環境NGO FoE Japan／日本]

<http://www.foejapan.org/>

キルギスタン

32. キルギス共和国、Issyk-Kul、Jalalabat、Narynの3地域の生態系保全と環境教育

キルギスタンは生物多様性に富む国だが、近年、水質悪化や経済・観光開発等による環境悪化が進行。Issyk-Kul湖周辺地域、南部Jalalabat地方のウォールナット森林、北部山岳地帯のNaryn地域の森林を代表例として取り上げ、3地域の自然環境監視や生態系保全について、競い合いのキャンペーンを行うなど、環境教育の浸透を図る。

[Ecological Movement "BIOM"／キルギスタン]

<http://ecoeeducation.host.net.kg/>



バングラデシュ南西部・サンダーバーンでマングローブを植林・再生させる／Centre for Coastal Environmental Conservation。

パラオ

33. パラオ、Techakl 自然保護区での保全活動

Techakl自然保護区は生物多様性豊かな島だが、近年、大規模開発計画が持ち上がっている。州政府と協働で、基礎的調査や管理計画の策定、啓発普及のための冊子づくり、広報活動等を行い、保全に寄与していく。

[Belau Cares INC.／パラオ]

エクアドル

34. ガラパゴス諸島エスピニョラ島の絶滅危惧固有種の救済復元計画

ガラパゴス諸島は進化論発祥の地であり、動植物とも固有種に富んでいる。しかし、人口の増加と帰化生物のため、局所的に自然破壊が進行。2年計画でエスピニョラ島を対象として、ウチワサボテン、レコカルプス個体群の自然復元を進める。

[ガラパゴス・ダーウィン研究所／エクアドル]

<http://www.darwinfoundation.org/>

パラグアイ

35. 入植50周年に向けた植林活動と環境教育

イグアス滝から西方約50kmに位置する通称イグアス移住地は、11年に入植50周年を迎える。原生林開墾の努力により、同国を代表する穀倉地帯となっているが、環境悪化も目立つ。農業安定のために植林が急務なことに加え、移住地管内で水力発電所の円借款計画が決定したこともあり、環境保護に向けた植林の実施と環境教育の浸透を図る。

[イグアス日本人会／パラグアイ]

ギニア

36. 自然への回帰による人間と動物の新規共生を目指す「保護林」の造成

ギニア中部のモロタ村で実施した熱帯林再生の成果を踏まえ、首都コナクリ西北130kmのウオレア村で、約300年前の江戸時代に行われた「三富新田」事業をモデルに、保護林造成植林による自然環境の再生に努め、慢性的な食糧不足の解消に貢献する。

[(特) サバ=西アフリカの人達を支援する会／日本]

<http://supa.web.infoseek.co.jp/>



ブラジルとの国境の町「シダ・デ・エステ」と首都アスンシオンを結ぶ国際道路で、ユーカリや松、桜を植林／イグアス日本人会。

ケニア

37. マサイマラ国立保護区における生物多様性確保のための環境保全プロジェクト

野生動物の宝庫であるマサイマラ国立公園は、国の財源の多くを観光に依存するケニアにとって重要なエリア。しかし、資金的、技術的課題から道路インフラが未整備で、無秩序に走行するサファリカーによる環境悪化が著しい。生物多様性を確保するため、野生生物環境保全計画の策定や道路ネットワークの整備、管理者の育成に努める。

[マラ・コンサーバンシー／ケニア]

<http://www.mpata.com/>

チャド

38. 難民キャンプおよび周辺地域における環境プロジェクト

チャド東部のワッダイ、ビルティン両州では、スーダンからの難民流入による環境の悪化が著しく、地域全体の植生と動物の激減、土壌荒廃と農業壊滅が懸念される。5つの難民キャンプ周辺地域で、改良カマド普及による樹木伐採の軽減や、植林による自然回復・環境保全に取り組む。

[緑のサヘル／日本]

<http://www.jca.apc.org/~sahel/>

アジア

39. マングローブ域環境の保全と有効利用のための現地活動の支援、これに寄与するマニュアルの編集・頒布

ベトナムとミャンマーにおいて、マングローブ域の環境保全と有効利用のための調査・究明を行うとともに、活動を通じて民生向上支援を行う。また、これまでの知見を系統的に整理し、各国の当事者が利用できる英文の平易なマニュアルを編集・頒布する。

[マングローブ植林行動計画／日本]

<http://www3.big.or.jp/~actmang/>

40. アジア太平洋地域の水鳥、湿地保全に向けたアジア水鳥センサスの作成

広大な沿岸域と多くの湿地帯を有するアジア太平洋地域は、400種を超える水鳥の重要な生息地。アジアにおける水鳥のセンサスづくりは、87年より25カ国が進められ、6000カ所のサイト・データを収集。モニタリング活動の一層の推進を目指し、センサスづくりをサポートする技術資料の開発や研修フォーラム等の実施に努める。

[Wetlands International-Malaysia Office／マレーシア]

<http://www.wetlands.org/>

41. アジア各地での海岸保全と災害予防についての映像制作

インド洋大津波による海岸線の被害が、マングローブ林の有無により大きく異なることに着目。海岸の環境保護は、台風や海面上昇などの自然災害の予防に必須であることを啓蒙するテレビ番組づくりを行う。併せて、タイ等での日本のNPOによるマングローブ林保全の現場を紹介。

[環境テレビトラスト日本委員会／日本]

<http://www.tve.org/>

42. ヘラシギの越冬地、中継地における保全活動

ヘラシギの越冬地、中継地であるタイ・コットカム塩田、韓国のセマングム河口を対象に、生息状況の情報獲得、中継地の利用の仕方に関する調査などを行う。また、観察情報の収集やデータベースの構築を行う。

[日本湿地ネットワーク／日本]

<http://www.jawan.jp/>

43. アジア湿地イニシアティブ・フェーズⅡ

アジア湿地イニシアティブを設置し、課題抽出、調査研究を行い、地域ワークショップを行う。それらの積み重ねで、アジアの湿地保全と賢明な利用に、国際レベルで貢献していく。

[ラムサールセンター／日本]

<http://homepage1.nifty.com/rcj/>

44. アジアにおけるIBA保全事業

IBA(鳥を指標とした重要自然環境)に焦点を当て、東チモールでの保全地域の国立公園指定化、ベトナムでのレッドリバー河口のアセスメントを行い、自然保護事業の再検討を行う。

[バードライフ・アジア／日本]

<http://www.birdlife-asia.org/>

その他

45. 北方四島における生態系保全と一次産業の共生に関するモデル形成

北方四島は、生物多様性に富み、生物生産性も高いが、近代漁法の導入、密漁・乱獲・密猟により生態系の破壊が進んでいる。過去8年間の調査をまとめ、保全計画の立案と提案を行う。また北方四島在住のロシア側研究者を招聘し、共同管理体制を打ち立て、技術移転を実施する。

[(特)北の海の動物センター／日本]

46. 東アジア諸国における環境教育事業事例のデータベース作成およびワークショップ実施事業

東南アジア諸国では環境教育にかかわるNGOが続々と誕生しているが、活動内容は十分に把握されていない。今年度は、主に台湾、パキスタン、スリランカ等を対象に、各団体の事業事例のデータベース化を行う。

[(社)日本環境教育フォーラム／日本]

<http://www.jeef.or.jp/>

47. 2006年国際クマ会議の日本開催と、アジアにおけるクマ類の生息動態・保護管理の現状整理、保護管理指針の提案

自然環境の多様性の指標として重要なクマ類の生息動態や保護管理の情報は極めて限られている一方、熊胆目的の乱獲や密猟が国際的に問題となっている。06年10月、アジアで初めて日本で開催される国際クマ会議を契機に、アジアのクマ類研究者のネットワークづくりや共同調査に基づく保護管理施策の確立等に努める。

[IBA2006日本開催実行委員会／日本]

<http://www.japanbear.org/iba/>

日本

48. 白山山麓ツキノワグマの生態調査と保護に関する普及啓蒙

岐阜県白川村馬狩地区は、豊富な自然が残された旧里山で、人とツキノワグマとの共生を研究するには格好の地区。奥山と里山の関係性を見極め、人とクマとの共生関係を取り戻すために、ツキノワグマ獣毛の採取、DNA解析などを行い、クマの人里への出没メカニズムを解明する。

[(特)白川郷自然共生フォーラム／日本]

49. インナータグ装着によるウミガメの性成熟年齢の調査研究

屋久島は北太平洋最大のアカウミガメの産卵場。05年11月にラムサール条約に登録された永田浜を中心に、ウミガメの産卵調査、移植等の保護を行い、子ガメへのインナータグ装着による性成熟年齢や母浜回帰の調査活動を通じ、子ガメの回遊や親ガメになる確率の実態を解明する。

[(特)屋久島うみがめ館／日本]

<http://www.unigame-kan.org/>

50. 生き物豊かな福島潟自然学習園の創造と潟の環境保全・普及活動

福島潟は天然記念物のオオヒシクイなど、野鳥や水生植物の宝庫であるが、家庭排水による水質悪化などによって貴重な生き物が減少しつつある。市民とともに自然学習園の維持管理、水質調査、地元の小・中学校への出前授業を行い、環境の保全、再生に努める。

[(特)ねっとわーく福島潟／日本]

<http://www.5e.biglobe.ne.jp/hishikui/>

51. 日本産海藻・海草生態図鑑の作成とその利用を通じた沿岸生態系の理解の促進～伊豆半島モデルケース事業

近年、水温上昇や沿岸開発による藻場の環境悪化から、海藻、海草の植生の変動が懸念。沿岸生態系保全への理解を得るには、植物の生態図鑑の整備が必須であり、漁業やマリンスポーツの盛んな伊豆半島を対象に、ダイバーや漁業関係者と協働し、生態図鑑を作成し、その利活用を図る。

[(特)日本国際湿地保全連合／日本]

<http://www.wi-japan.com/>

52. 生物多様性条約において開始されようとしているビジネスと生物多様性のエンゲージメント強化イニシアティブの日本における展開と深化の可能性調査

生物多様性条約の枠組みの下で05年から始まった「ビジネスと2010年生物多様性チャレンジ」イニシアティブとの連携を念頭に、ビジネスと生物多様性の取り組み事例の状況調査を行い、セミナー等の開催を通じて、その普及啓蒙と国際的な連携のあり方を考える。

[生物多様性JAPAN／日本]

<http://www.bdnj.org/>



ツキノワグマの生態調査のために首輪を取り付ける／(特)白川郷自然共生フォーラム。

53. 佐渡トキ野生化支援プロジェクト

トキの野生復帰・放鳥計画を視野に、佐渡市の新穂・両津などの地域で餌場となる田んぼを増やす。「耕さない・冬・水・田んぼ」という不耕起栽培農法で稲作りを行っている水田は現在20ha程度だが、2010年には100haを目標とし、技術指導、グリーンツーリズムの企画、本農法による米の消費拡大などを進める。

[(特)メダカのがっこう／日本]

<http://www.npomedaka.net/>

54. 富士山の森再生活動

96年9月の台風によって、風倒の大被害(全体で1000ha)を受けた富士山国有林の人工林(ヒノキ、ウラジロモミ、カラマツ、スギ)の38haが対象。広葉樹などを植林するとともに、センサーカメラによるシカの食害調査なども行い、多様性豊かな自然林へと再生を図る。

[(特)富士山自然の森づくり／日本]

<http://www.geocities.co.jp/NatureLand/4378/newpage13/newpage13.htm/>

55. 富士山環境リーダー養成プロジェクト

富士山周辺地域において、環境問題とその改善に向けた市民自身による啓発活動をより広範囲に行い、実践的な環境保護・保全の継続を図るためのリーダーとなる人材育成を行う。

[(特)富士山クラブ／日本]

<http://www.fujisan.or.jp/>

56. ヤマネの総合的な研究から、日本と世界のヤマネ保護、森林保全、環境教育の応用化へ～特にヤマネブリッジのスタンダード化に向けて

ニホンヤマネは日本固有の天然記念物で準絶滅危惧種とされ、ヨーロッパでも保護種とされている。しかし、自然林破壊や道路開発でヤマネの生存が脅かされており、国内4カ所とスロベニアの調査地でその生態を解明するほか、簡易なヤマネブリッジの開発や遺伝・栄養学的研究も行い、世界のヤマネ保護と森林保全に努める。

[ニホンヤマネ保護研究グループ／日本]



伊豆半島での海藻調査の様子／(特)日本国際湿地保全連合。



病院に救護されたツシヤマメネコの治療風景／(特)どうぶつたちの病院。

57. ラムサール条約登録地宍道湖周辺における 水鳥の採餌環境を維持するための調査・啓発活動 ～「生きものブランド米」の創出と「ワイズユース」

宍道湖はコハクチョウ集団越冬地の南限で、松江市浜田町には200羽程度が飛来する。この水田地帯で冬期湛水などの試験調査を行い、コハクチョウの採餌環境を守る諸条件を明らかにする一方、ブランド米の育成など農産物振興にも資する仕組みによって、ラムサール条約のワイズユースの理念を活かす実践例を目指す。

[(財)宍道湖・中海汽水湖研究所／日本]

58. ツシヤマメネコ保護プロジェクト

ツシヤマメネコは、種の保存法に基づき保護されてきたが、交通事故やトラバサミ、野生化したイエネコとの生態的競合、FIV(ネコエイズウイルス)の感染などで危機的な状況にある。そのため「ヤマメネコ119番」による24時間救急対応とFIV感染症の疫学調査・予防を行う。

[(特)どうぶつたちの病院／日本]

<http://yanbarukuina.jp/>

59. 絶滅危惧種アユモドキの保護プロジェクト ～繁殖生態と遺伝的多様性を解明する研究

日本固有の淡水魚・アユモドキは、国の天然記念物で絶滅危惧ⅠA類に指定され、岡山県の河川と琵琶湖・淀川水系のみに分布する。京都府亀岡市、船井郡八木町、岡山市で調査を行い、産卵を誘発させるラバーダムの変動と水位の関係を解明し、水質・プランクトン量調査、繁殖生態調査、遺伝子解析を行う。

[有限責任中間法人 水生生物保全研究会／日本]

60. 海岸侵食のために孵化できない アカウミガメの卵の保護移植

アカウミガメは、北太平洋では唯一日本列島を産卵場としているが、海浜の侵食等により産卵巣の冠水、流失が多く見られる。侵食が問題となっている宮崎県大炊田海岸、和歌山県千里浜海岸、愛知県表浜海岸で、卵の移植体制を確立し、保護移植技術の浸透を図る。

[(特)日本ウミガメ協議会／日本]

<http://www.umigame.org/>

61. 滋賀県大津市伊香立町下龍華村における 地域活性化を目指した自然資源管理事業

大津市近郊の和邇川流域は、かつては豊かな里山植生であったが、多くは放置され、産廃物などで荒れている。倒木の回収、植林、環境調査などの自然資源管理を行い、人材育成の場、市民が生物多様性を体験する場として活用する。

[(社)日本国際民間協力会／日本]

<http://www.kyoto-nicco.org/>

62. 森と湖と人と農をつなげる環境パートナーシップ市民事業 ～霞ヶ浦・北浦の外來魚・未利用魚駆除と 流域農業の連携による生物多様性保全

霞ヶ浦・北浦流域において、水質浄化と生態系の保全、一次産業の振興とともに、消費者に安全な地域ブランド特産品を提供することを目標に、新しい社会モデルを提案。具体的には、魚類生態系の調査、外來魚・未利用魚の捕獲水揚げ量の評価、魚粉の地元農業への活用などを行う。

[(特)アサザ基金／日本]

<http://www.kasumigaura.net/asaza/>

63. トキの野生復帰に向けた棚田・里山・水辺環境の モデル構築および地域環境教育

08年のトキ野生復帰のため、佐渡市キセン城地域を対象に、放棄里山林・水田などでトキの餌場や営巣木・ねぐらの再生を行う。また放棄棚田の復旧整備や里山の除間伐、生息環境のモニタリングを行い、冬季餌量を増やすために休耕田・生産調整田の再配置とピオトープ化を進める。

[新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター／日本]

<http://www.agr.niigata-u.ac.jp/>



2005年度の企画部会活動を振り返って

2005年度の自然保護協議会の活動として、「日本経団連自然保護宣言」の行動指針の具体化を、主に企画部会を中心に推進を図ってきた。この機会に、1年の活動を振り返り、本年度の計画に反映させていきたいと考えている。

日本経団連自然保護協議会 企画部会長、トヨタ自動車株式会社 環境部企画グループ 担当部長
西堤 徹

■国内のプロジェクト視察

国内外のNGOとの交流促進という観点から、さまざまな活動を実施してきた。まずプロジェクトの活動状況を知るために、NGO活動報告会を継続して行い、合計9回、10団体が報告を行った。この会は通算で24回を数え、定着してきた。その他、国内においてKNCFが支援するNGOの活動現場への訪問が重要だと認識を持っており、年2回程度企画部会行事として実施することを目標としている。

まず6月に、「屋久島うみがめ館」が活動している鹿児島県屋久島の永田浜を訪問した。ちょうどウミガメの産卵時期にあたり、夜間に浜に上がってくるウミガメの産卵風景を見ることができた。大変貴重な体験ができ、また現地のボランティアを含め、スタッフの方々の昼夜にわたる熱心な活動を見て、その大変さを実感した。

11月には新潟県の豊栄(現新潟市)と佐渡島を訪ね、「ねっとわーく福島潟」「新潟大学」「メダカのがっこう」の各活動地を視察した。

福島潟では、ちょうど野鳥フォーラムが行われており、各地の関係先の活動報告を聞く機会を得た。佐渡島では2008年のトキの野生復帰に絡んで山間地の棚田復元や平野部での餌場となる田んぼを不耕起栽培で拡大させる活動を視察した。現地の農家の方々と意見交換を行うなど、有意義な交流が行われた。

またこの3月には建築家の安藤忠雄先生のご案内で瀬戸内海にある直島を訪れ、環境保全や文化的な創造活動について視察させていただく機会を得、翌日には大津市の琵琶湖のほとりで「日本国際民間協力会」が行っているプロジェクトの活動地を訪問

した(本号特集記事に掲載)。

このような視察は一昨年より実施しており、まさに「百聞は一見に如かず」であり、意義のある活動であると思う。委員各位も多忙な中、できる限り時間をつくっていただいているが、このような機会をできるだけ多くの方々に持っていただきたいと思っている。

■税制・環境教育等の勉強会

寄付税制や環境教育に関する事項は重要な行動指針の一つであるが、残念ながら、これまでのところあまり具体的な活動に結びついていない。まず、これらの問題に関する知識を共有しようと、企画部会での勉強会を実施した。

税制については、日本NPOセンターの山岡義典先生を講師にお招きしてお話を拝聴するとともに、NGOの方々との意見交換を行った。NPOに関する税制については国会において審議中であったため、その成り行きが注目された。

また環境教育に関しては、協議会事務局において企業が取り組んでいる環境教育の現場取材を行い、本誌等で紹介に努めた。

本年度はこれらを課題として、引き続き具体的な方策を考えていきたい。いわゆる07年問題なども考慮に入れた人材交流や次世代への環境教育を中心に、意見交換会等の場を提供できればと思っている。

福島潟を視察する筆者(写真右端)。



■国際機関等との交流

国際NGOとの交流を行い、情報交換を活発に行うことも重要なことである。昨年はコンサベーション・インターナショナルのラッセル・ミッターマイヤー会長が来日し、大久保尚武会長との懇談、意見交換を行った。併せて、シンポジウムの後援を行った。

バードライフ・アジアとその関連団体との交流会を行い、各団体がやっている活動事例の紹介や日本での企業とNGOとの協働に関する事例紹介を行う機会を得た。また11月には企画部会代表者をウガンダでのラムサール条約締約国会議に派遣し、協議会活動の紹介等を行った。

さらに2月には、ノーベル平和賞受賞者であるワンガリ・マータイ・ケニア環境副大臣に基調講演をいただくとともに、活動事例の報告を行うなどフォーラムを開催し、筆者からも協議会の活動状況紹介等を行った。マータイさんの真摯なお話で大変感銘を受け、盛況なフォーラムができたと思っている。このような交流は、さまざまな機会をとらえて行っていきたい。

ご寄付を いただいた 皆様

2006年4月20日現在

2004年4月～2006年4月にご寄付をいただいた法人・個人は以下のとおりです。順不同、敬称略。

法人寄付

(株)アイ・エックス・アイ
アイシン・エイ・ダブリュ(株)
アイシン精機(株)
曙ブレーキ工業(株)
アコム(株)
旭化成(株)
アサヒビール(株)
味の素(株)
あすか製薬(株)
アツギ(株)
(株)ADEKA
(株)アドバンテスト
(株)穴吹工務店
アメリカンファミリー生命保険会社
安藤証券(株)
(株)飯田産業
(株)イオンファンタジー*
(株)井田両国堂
伊藤忠エネクス(株)
伊藤忠商事(株)
伊藤忠テクノサイエンス(株)
(株)イトーヨーカ堂
稲畑産業(株)
岩合産業(株)
エイベックス・グループ・ホールディングス(株)
エーザイ(株)
エスエス製薬(株)
SMK(株)
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ
(株)荏原製作所
大阪製鐵(株)
大阪トヨペット(株)
王子製紙(株)
岡部(株)
沖繩電力(株)
尾崎商事(株)
(株)オーディオテクニカ
オリックス(株)
(株)オリバー
花王(株)
科研製薬(株)
カシオ計算機(株)
鹿島建設(株)
鹿島道路(株)
片岡物産(株)
(株)桂川精製製作所
(株)加藤製作所
(株)角川ホールディングス
かどや製油(株)
(株)上組
カヤバ工業(株)
川田工業(株)*
キッコーマン(株)
キヤノン(株)
キュービー(株)
共同印刷(株)
協和発酵工業(株)
極東貿易(株)
麒麟麦酒(株)
(株)さんでん

(株)金羊社
クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン(株)
栗田工業(株)
栗林商船(株)
(株)クレディセゾン
黒田電気(株)
グンゼ(株)
(株)高知銀行
(株)コーエー
コクヨ(株)
(株)小松製作所
コムシスホールディングス(株)
佐川急便(株)
沢井製薬(株)
(株)山陰合同銀行
三機工業(株)
(株)サンゲツ
(株)シーイーシー
シスコシステムズ(株)
(株)資生堂
シチズン時計(株)
清水建設(株)
住友電気工業(株)
(株)ジャステック
(株)ジャパンメンテナンス
(株)住生活グループ
昭栄(株)
新光証券(株)
(株)シンシア
(株)新東工業(株)
新日本石油(株)
住友商事(株)
住友信託銀行(株)
住友スリーエム(株)
住友林業(株)
(株)スリオンテック*
スルガ銀行(株)
セイコーエプソン(株)
積水化学工業(株)
セコム(株)
(株)セブン・イレブン・ジャパン
セメダイン(株)
セレスティカ・ジャパン(株)
センコー(株)
千住金属工業(株)
センチュリー・リーシング・システム(株)
総合メディカル(株)
ソニー(株)
ソニー生命保険(株)
(株)損害保険ジャパン
第一交通産業(株)
大王製紙(株)
(株)だいこう証券ビジネス
大成建設(株)
ダイタン(株)
大同メタル工業(株)
(株)ダイドール・リミテッド
(株)ダイナシティ
太平洋工業(株)
大和ハウス工業(株)
武田薬品工業(株)
(株)タチエス
田辺製薬(株)
中越バルブ工業(株)
(株)土屋組
(株)ディー・エイチ・シー
TFPコンサルティンググループ(株)
(株)帝国データバンク
帝人(株)
(株)テーオーシー
鉄道機器(株)
テルモ(株)
電源開発(株)
(株)デンソー
(株)電通
テンプスタッフ(株)
東京海上日動火災保険(株)
東京ガス(株)
東京コカ・コーラボトリング(株)

東京電力(株)
東京トヨタ自動車(株)
東京トヨペット(株)
東京貿易(株)
(株)東芝
東芝イーエムアイ(株)
東陶機器(株)
(株)東北新社
(株)東陽
東洋鋼板(株)
東レ(株)
トーア再保険(株)
(株)ドクターシーラボ
凸版印刷(株)
(株)巴川製紙所
トヨタ自動車(株)
(株)豊田自動織機
豊田通商(株)
トヨタ輸送(株)
鳥居薬品(株)
長瀬産業(株)
(株)中村自工
(株)なとり
ナブテスコ(株)
(株)ナムコ
南国殖産(株)
ニチアス(株)
(株)ニチレイ
日揮(株)
(株)日建設計
日産自動車(株)
日清オイリオグループ(株)
日新製糖(株)
(株)日清製粉グループ本社
日神不動産(株)
日清紡績(株)
日東電工(株)
(株)NIPPOコーポレーション
(株)ニフコ
日本オーチス・エレベータ(株)
日本ガイシ(株)
日本紙バルブ商事(株)
日本金属工業(株)
日本原子力発電(株)
日本地震再保険(株)*
日本証券金融(株)
日本水産(株)
日本精工(株)
日本製紙(株)
日本製紙連合会
日本大昭和板紙(株)
日本たばこ産業(株)
日本調剤(株)
日本テレビ放送網(株)
日本電気(株)
日本農産工業(株)
日本ヒューム(株)
日本ペイント(株)
日本レコードマネジメント(株)
(株)ノーリツ
野村ホールディングス(株)
伯東(株)
パシフィックコンサルタンツグループ(株)
浜松ホトクス(株)
(株)パレスホテル
(株)パンダイ
阪和興業(株)
(株)ピーエス三菱
ビーコンシステム(株)
日立キャピタル(株)
(株)日立国際電気
(株)日立情報システムズ
(株)日立製作所
(株)日立総合計画研究所
(株)日立ハイテクノロジーズ
ビューラー(株)
ファンック(株)
藤倉化成(株)
富士港運(株)

富士写真フィルム(株)
富士ゼロックス(株)
富士通(株)
(株)フジテレビジョン
富士電機ホールディングス(株)
フタバ産業(株)
芙蓉総合リース(株)
(株)フラスラムジャパン*
北越製紙(株)
HOYA(株)
(株)ホリプロ
本田技研工業(株)
前田建設工業(株)
松下電器産業(株)
松下電工(株)
丸八倉庫(株)
美樹工業(株)
三島製紙(株)
三井物産(株)
(株)三菱地所設計
三菱重工(株)
三菱商事(株)
三菱製紙(株)
三菱電機(株)
(株)三菱東京UFJ銀行
三菱UFJ投信(株)*
三八五流通(株)
ミヨシ油脂(株)
(株)メイテック
森永製菓(株)
(株)ヤクルト本社
(株)山武
(株)山田洋行
(株)ユーエスシー
ユニ・チャーム(株)
吉野石膏(株)
ライオン(株)
(株)リコー
(株)菱食
菱洋エレクトロ(株)
リンナイ(株)
レンゴー(株)
(株)ワタナベエンターテインメント

<ビッグフットフォレストクラブ>
(株)アールシーコア*
(株)山崎建設*
(株)ビッグフット秀和*
(株)ビッグフット高勝*
(株)ウッディハウス*
(株)ビッグフットL*
(有)安達住建*
(株)藤栄住宅*
橋本建設(株)*
西永建設(株)*
長電建設(株)*
吉澤商事(株)*
伊藤建設(株)*
(株)ビッグフット東海*
(株)高橋建築*
(株)ビッグフット京神*
(株)ビッグフット瀬戸内*
新生建設(株)*
中村建設(株)*
ビッグフット互助会*

<その他>
「エコパートナーズ」(愛称:みどりの翼)
三菱東京UFJ銀行ボランティア預金寄付
(株)ジェシービー
UFJニコスWAIWAIプレゼント
(財)トラスト60
積水化学自然塾
フクシマコウギョウ
サボテンクラブ

*印は日本経団連非会員企業

個人寄付

青木淳美
安形哲夫
浅沼健一
足助明郎
阿比留 雄
新井 陽
荒木隆司
飯田吉平
井植 敏
井奥博之
井川正治

池田守男
池淵浩介
石井克政
石倉大幹
石坂芳男
石塚義和
伊豆詰次
出原洋三
市田行則
伊地知隆彦
市橋保彦

一丸陽一郎
出光 昭
伊藤謙介
伊藤住吉
伊藤隆一
伊奈功一
稲垣紘史
稲葉良規
井上輝一
井上博信
井上 賢

井上雄次
伊原保守
井原芳隆
今井恵美子
伊良原龍一
岩崎宏達
岩瀬隆広
岩月一詞
上杉貞夫
上田建仁
上原 忠

上原尚剛
氏家純一
牛久保雅美
牛山雄造
内田弘通
内山田竹志
宇都宮吉邦
宇野允恭
浦西徳一
遠藤 玄
大木島 巖

大久保尚武
大澤純二
大須賀洋郷
太田 元
太田正彦
大竹公一
大西 匡
大林剛郎
大林芳久
岡部 聰
岡部達之介

岡村宏太郎
小川信也
小川智子
興津 誠
奥田 碩
奥山秀朗
桶谷 省
小澤忠彦
乙葉啓一
鬼塚喜八郎
小山田浩定

寛 哲男
梶井英二
片山政徳
勝保恒久
加藤順介
加藤光久
金田 新
金子達也
川上 博
川島新一
木内 栄

岸 曉
北 修爾
北 妻夫
北村必勝
橋高克也
木原 誠
紀陸 孝
銀屋 洋
久保地理介
熊谷 繁
倉田能達
栗岡亮爾
栗林定友
栗和田榮一
小枝 至
古賀行行
小暮正彰
小西正巳
小林秋道
小林 料
小林陽太郎
小吹信三
駒田邦男
齊藤 潔
坂口美代子
坂本 宏
佐々木 透
佐々木 元
佐々木真一

笹津恭士
真田元清
三宮克弘
塩野元三
重久吉弘
シゲマツカシ
柴田昌治
島本明憲
下村 博
蛇川忠陣
十二町英之
白井芳夫
白根武史
白水宏典
末長範彦
末松哲治
杉崎盛一郎
鈴木和夫
鈴木賢一
鈴木 武
スズキトシロ
須藤誠一
瀬尾隆史
反町勝夫
平 論
高井正志
田頭秀雄
高橋 清
高橋徳行

高橋秀夫
高橋和平
高橋良治
高原慶一朗
高山 剛
宝田和彦
瀧本正民
田口俊明
武内宏允
武田國男
武田忠穂
白井芳夫
館 糾
立花貞司
龍村 豊
田中 勇
田中 清
田中健悟
田中公毅
田中久勝
田中義幸
谷口雅保
田保取平
田宮芳彦
垂石早苗
長 恵祥
張 富士夫
塚越東男
ツジアキヒト
辻 薫

辻 亨
辻 正道
土屋智義
東郷逸郎
東 洌 等
常盤敏時
常盤彦吉
戸塚健彦
豊田章男
豊田英二
豊田章一郎
豊田達郎
鳥飼一俊
中井昌幸
長井鞠子
中川勝弘
長沢誠一
永島陸郎
長瀬英男
中谷 章
長谷吉彰
長原萬里雄
永松恵一
中村公一
中村典夫
中村 弘
中村 雄
仲山 章
名取小一

新美篤志
西川由朗
西堤 徹
西野敏克
西野虎之介
西村 正
西村正史
西本甲介
二橋岩雄
仁瀬義夫
丹羽宇一郎
豊田章一郎
野口忠彦
信元久隆
野見山昭彦
野村高史
羽賀昭雄
橋本 徹
長谷川康司
畑 隆司
八丁地 隆
服部哲夫
ハットリオル
堀 義一
濱田松一
早川 勝
林 正
林田紀久男
葉山稔樹

原 宏
樋口廣太郎
久田修義
秀平政信
日比賢昭
平井和平
平島 治
平野浩志
平山良明
畫馬輝夫
福井喜久子
福田美知子
福武總一郎
船野龍平
古庄昭憲
古田 武
古谷俊男
古橋 衛
保木将夫
堀籠登喜雄
本庄正史
前川真基
前田又兵衛
楨原 稔
真下正樹
松井秀文
松浦 仡
マツサキタツヒロ
松永隆善

松村雄吾
松本栄一
松本國夫
真鍋邦夫
真鍋豊男
馬淵隆一
滿生英二
三木繁光
水巻武一
御手洗富士夫
三戸靖之
宮崎茂彦
宮原賢次
宮原成夫
宮原秀彰
向笠慎二
村上仁志
村瀬治男
村田嘉一
茂友三郎
森 友三
森岡仙太
安居祥策
安田友彦
安原 正
柳井俊郎
山内康仁
山口千秋
山口憲明

山口政廣
山崎誠三
山崎 学
山路克彦
山田清貴
山田淳一郎
山本昌司
横井 明
横田 昭
横山 宏
横山元彦
吉田 健(ケン)
吉田二郎
吉田 宏
依田 巽
若林 忠
若山 甫
脇村典夫
和田文彦
渡邊則利
渡邊浩之
渡 文明

〈ビッグフットフォレストクラブ寄付者〉

二木浩三
矢島繁雄
谷 秋子
上村陽子
川又義寛
三須宏子
白鳥陽子
濱口洋子
安田秀子
菊地史孝
成毛幸夫
斉藤 一
飯銅浩一
冬 賀 理
石川裕美
石田良彦
小宮知幸
小曾根秀信
工藤美佳
藤本博幸
池田 均
石井彰宏
小松原孝道
加藤美恵子
林 文夫
大内 隆
来城 徹
加瀬さおり
小山田伸治
神宮司綾子
堀部朝広
河合 透
富山弘之
井手一孝
吉田忠利
田畑範行
村田佳津江
蓮本千春
池松直文
平山敏郎
奥田健太郎
三樹 哲
小杉 慎
遠藤英雄
原田喜秀
山田 浩
浦崎真人

庵原晃一
井上大輔
木村 伸
今田浩二
菊池祥一
内藤幸夫
鎌田大樹
酒井 歩
斉藤博明
安島礼子
藤橋あい
瀬下未来子
山本健介
安田徹太郎
松本浩司
山下泉一
飯沼紀子
黒田祐子
河内直彦
岡本由美
作川憲一
跡路高弘
長谷川淳一
若林 桂
廣井裕治
平野 誠
工藤秀信
渡邊綾子
記内良之
岡水裕次
佐藤鎮治
芝 由紀
岸野純子
井手一孝
鎌田広道
田中恵美
前田由紀子
平松一隆
千頭和正記
鈴木康史
廣田慎也
羽切 知
前田清一
熊倉規彰
渡辺由紀子
仁保明美
後藤佳彦

佐藤友哉
伊藤孝行
細川大介
森 康範
鈴木純子
浅海直樹
有野三雄
若丸美和子
窪 健充
笠井輝久
飯島麻友美
山崎法夫
佐藤史恵
佐藤 優
武藤忠士
岡田泰好
高木智一
畑山陽子
浅野日幸広
松倉洋子
伊藤康士
佐々木恵美子
菊地久宣
初馬浩一
後村善勝
中嶋秀行
鹿島幸恵
佐々木純久
夏堀勝幸
渡辺正喜
加藤貴之
菅原二三夫
南波郁代
成田鉄也
伊藤 馨
岩田晋史
斎藤秀典
高橋幸子
三上真司
佐々木由美子
高橋勝行
千葉郁夫
木村幸博
遠藤節郎
野村昌弘
青田文尚
窪田 薫

菅野あや
亀川達郎
林 章司
佐藤宏信
大坪由記子
林 啓太
佐藤大輔
小林廣一
高野正広
長谷部徳明
小関直人
川原とさ子
鈴木美優子
丑田智彦
歌丸美佳
安部 誠
三上和子
鈴木亮一
鈴木正洋
高橋晃樹
高橋隆司
志田雄介
関根昭久
枝松真太郎
宗像 寛
福原紀子
遠藤隆宏
能藤克治
阿部 宙
肥後健一
地引幸弘
菅家伸一
佐々木 巧
菅野政仁
宗像智樹
長登直子
石森秀典
戸田充彦
半谷貴史
竹内成佳
宮田直樹
無木利宣
野崎儀憲
角田恵美
西村 彰
坂内恵子
三井裕佳

杉山芳則
安達正包
高島みどり
山中政司
中村慎二
近藤孝一
中島 健
井上広和
大貫不二子
鈴木智史
須田佳代子
近藤久子
橋本 修
橋本時雄
北村里志
斎藤理恵
土田千恵美
多田美奈子
目黒 博
小林孝幸
星野文男
上村和規
西永 均
久司一隆
角田 俊
月林浩一
室山正英
東 由香
浜尾睦子
坂野 理
加藤博昭
工藤公照
入江光司
吉田 猛
高木敏之
石井 充
石澤 充
宮澤智子
宮入俊人
関 秀希
長谷川芳隆
西沢好巳
有澤正秀
吉村 睦
桜井静香
桃澤ひろ子
向田曉彦

森本直也
吉田憲史
竹内園子
山内新一
甲村一也
吉岡盛幸
伊藤真紀
伊藤英門
高橋陽一
村瀬周二
岩田明宏
山本博之
園師隆之
高橋伸知
杉本一之
田中亜矢子
服部宏輔
清水 悍
内田信吾
宝木知代
後藤正明
伊藤妙子
松井昭二
野口伊八
富田儒人
宮治 誠
小佐野 賢
大橋政彦
福岡茂樹
神野大輔
黒木崇司
小寺絢一郎
中井朋子
鷺見和広
鬼頭 忍
松井美樹
藤崎香奈
橋本好正
三井 健
石塚健一
清水丈裕
木下朋子
筒井幹雄
小畑年範
田中琴美
平尾ひろみ
成松繁樹

須田智彦
宮田貢次
斉藤康二
見崎義輝
梶田衣里子
村瀬敏彦
深田久美子
高橋裕和
山根清美
里中伸弘
松中伸一
西井伸晃
森本真人
竹内光秀
近藤美由紀
新井文夫
山崎眞佐子
澤 正明
樋ヶ敷彦
岩越興二
高田直司
北脇照樹
紺野風子
前田仁司
酒井由雄
大藪栄子
嶋田剛司
高橋麻子
合田 智
川口真鋪
藤本 隆
西本豊美
奈良 隆
清川賢仁
山中邦夫
中山 豊
中村 聖
柳 雅弘
吉迫勝弘
上野山裕子
藤川昂崇
山本景弘
山本けい子
峰山光男
竹内洋子
平尾ひろみ
成松繁樹

室山慎哉
井山良彦
浅野訓正
岡本尚久
田尻卓也
野崎建二
鼻先 功
中村慎一郎
藤井祥子
田中達也
麻生高行
丸川雅紀
高橋 満
高田美智子
久保田賢一
佐柳亜聖
藤岡立志
吉野耕一
大塚千春
兼川 直
河村秀樹
河村秀樹
末永雅之
森重辰夫
井本優子
中村光雄
吉成朝子
佐伯達矢
知古嶋達也
中村 光
小松美絵
中村草子
小段和彦
堤 稚桂子
岡田崇志
田田裕樹
八原正治
上野美穂
江崎武志
土肥 純
伊東正弘
佐々木麗子
佐藤永隆

From Editors

●建築家・安藤忠雄先生の直島での講話には迫力があつた。将来の宝となる子どもたちのために感動を与えようと活動しておられる先生の顔つきには、建築芸術の巨匠としての凄みを感じた。豊島を再生する活動から始まった「瀬戸内オーリーブ基金」植林運動によって、瀬戸内海の島々に豊かな緑が甦る日も近いだろう。(真下)

●1990年、兵庫県警が不法投棄の摘発で豊島に入ったニュースの衝撃的な光景が目に残っている。それからの社団法人住民運動、中坊公平弁護

士の献身、公害調停を経て再生への道のり。私としては3回目の豊島訪問となったが、あらためて事件に想いを馳せた。(末松)

●直島で安藤忠雄先生からお聞きした「子どもの時に経験すべきことがなされていない」現状が問題というご指摘には、大いに考えさせられた。子どもたちに、どのように体験を伴った環境教育を行っていくか、その大切さを改めて思う。その辺りを問い直す企画行事を本年に行えればと思っている。(谷口)

カンボジアにおける学校と環境のプロジェクト

ムルップ・バイトン

■活動の背景

カンボジアでは長らく激しい内戦が続いていたが、終結後の1993年、国連開発計画(UNDP)の支援の下、環境教育委員会が設置され、以来、同委員会を中心に小・中学校における環境意識の向上、人材育成等が取り組まれてきた。98年には小・中学校の教師たちへ環境教育マニュアルが配付され、一層の取り組み強化を図ってきた。

そのような状況の中、ムルップ・バイトンは2000年より、プノンペンから120kmの距離にあるキリロム国立公園周辺のコンボン・スプ州にあるサムロン・トン、ティエボンおよびプノン・スルの3地域・32校を対象に、学校エコクラブ制度を導入し、環境教育マニュアルおよびエコクラブ活動の手引きを作成し、学校エコクラブの拡大・普及活動を行っている。

キリロム国立公園の周辺地域は多様な森林形態を有し、鳥類をはじめ多くの生物種の生息地となっている。また野生生物協会の調査では、国際的にも重要なサンベア、アジアゾウ、アジアクロシカ、シーロー、イー

ストアジアン・ヤマアラシ等、24種の哺乳類の生息が確認されており、希少種であるSpotted Linsangが目視された唯一の地域でもある。しかし最近では、木炭生産のための森林伐採、違法な狩猟や生息地の減少による野生生物の減少、ゴミ問題など、広範囲にわたる環境問題に直面している。

■ムルップ・バイトンとは

98年設立。ムルップ・バイトンは「緑の木陰」を意味し、教育とトレーニングを通じた環境意識の向上と持続的で公平な自然資源の利用を推進している。スタッフはカンボジア人30名、外国人3名の他、政府部門や寺院のカウンターパートから構成されている。

■05年度の活動状況

①32のモデル校、2つの拠点校および4つのセンターを設定し、校長やエコクラブ顧問の教師に対し、環境教育を指導する能力を高めるため、さまざまな活動を行った。例えば、環境教育マニュアルをどのように有効に活用するかなどをテーマとしたワークショップや、エコクラブ活動が成功している学校への視察・研鑽会などである。その結果、新たに8つの学校を加え、計16校が自主的にエコクラブの運営を始め、合計1155人の生徒に対し環境教育を行うことができた。

②ワークショップでエコクラブ顧問の教師たちに菜園づくりの講習を行った。彼らの指導で9つの学校で野菜づくりが始まり、生徒たちにも食料として配られるようになった。また、エコクラブ活動の参考とするためにチャンボック村等へのエコツアーを実施し、意見交換なども行った。

③エコクラブ顧問の教師たちの執筆による、

野生生物や除草剤を特集した「エコニュース」を定期発行し、関係各校に1700冊を配付した。

④エコクラブ活動の進展に伴い、6つの育苗圃が作られ、その苗を学校へ植樹。堆肥や薬草、花卉などの栽培も行われた。

これらの活動に加え、ムルップ・バイトンでは昨年、日照りがひどく、家業の農作業を手伝うために学校の授業に出れない生徒が増えていることに対し、世界食糧計画(WFP)を巻き込んで、学校をベースにした食糧自給プログラムを行うよう提案を行っている。また、各学校にはエコクラブ活動を進めていく施設(水路や池など)が不足しており、資金集めなど地域を巻きこんだ活動が必要となっている。(文責 谷口)

*日本経団連自然保護基金は、2005年度に120万円の支援を行っています。



木曜日に行われている学校エコクラブ活動の様子。



マイクロプログラムについてのトレーニングを校長やエコクラブ顧問の教師に対して実施。

ロシア・ビギン川森林地帯の 住民と行う流域保全活動

国際環境NGO FoE Japan

連合体Friends of the Earth Internationalの一員で、国際的な環境問題に取り組む。会員457名、専従職員11名。94年、ロシアにおける森林生物多様性の調査と保全を目指して、シベリア森林ホット・スポット・プロジェクトを始めた。以来、ロシアのNGOと共同で、保護区の設定等にかかわっている。

■05年度の活動状況

①現地クラスヌイ・ヤール村の児童や大人への環境学習：森林を守ることが大事だということを教えるため、日本より教職経験者をボランティアとして派遣し、紙芝居形式で授業を行った。

②流域の密猟・不法伐採の監視・報告：ソ連邦崩壊後の急激な資本主義の広まりによるひずみや、州の森林管理に関する予算が減少しているため、密猟が後を絶たない状態。狩猟組合を通じて、住民による密猟パトロール隊を結成、新たにパトロール艇を製造して、監視活動を強化している。パトロールに参加することで、住民たちの意識向上にもつながっている。

③エコツーリズム基盤の拡張プログラムづくりとマネージメント向上：住民の生計向上のため、旅行社と連携してエコツアーを開始。宿泊施設を建設し、自然観察トレイルの設定、ビジター用施設の展示づくりなどを行い、参加者が流域の自然と文化を学ぶことのできるプログラムを企画した。日本からのエコツアーグループの受け入れやマスコミの取材訪問などがあつた。

④木材以外の林産物の利用による森林の複合的利用促進：ブルーベリーや蜂蜜、木製品など、お土産づくりを行った。特に蜂蜜は年10tが生産され、ロシア国内で販売

された。今後は、日本などで販路開拓を図る必要がある。

●
この地域は世界自然遺産の候補地ともなりうる貴重な自然を残しているが、ロシア国内の保護政策が十分ゆき届いておらず、今後、整備が必要とされる。また、非林産品の販路開拓やエコツアーの収穫などが当面の課題だが、住民がこれからどのように自立して、継続的に実施していくかが大きな課題といえる。（文責 谷口）

*日本経団連自然保護基金は、2005年度に360万円の支援を行っています。

■活動の背景

ロシア沿海州のビギン川流域には約130万haの針葉樹林・針広混交林が残っており、絶滅危惧種のトラ、アムールトラ(推定40~50頭生息)をはじめ、ツキノワグマ、シマフクロウ、タンチョウなど希少種・絶滅危惧種が多数生息している。

ソ連邦の崩壊後、ウデヘ族など原住少数民族の生活が不安定となっており、一部住民や外部の人間によるクロテン、ミンクなどの希少動物の密猟、シカやイノシシなどアムールトラの餌となる動物のオーバーハンティング、食物連鎖を支える実をつける樹木の盗伐・不法伐採が発生し、生態系に悪影響を及ぼしている。

原生的な生態系が残るビギン川流域森林地帯の生物多様性を保全するために、住民自身がその担い手となっていくことを助けることを活動の基本とする。

■国際環境NGO FoE Japanとは

1980年設立。60カ国に事務所を持つ



ビギン川流域の密猟・不法伐採を監視するために行われた地元猟師によるパトロール。



現地クラスヌイ・ヤール村の小学校で環境学習を行う。

連載

企業が進める 自然環境教育の現場を訪ねて

5



リコー自然教室の現場から仰ぐ、中津江村の山々。

環境ボランティアリーダー養成プログラム

リコーグループの「自然教室」

自然保護や環境保全を進めるために、企業自ら地域の人たちやNGOとともに積極的に取り組んでいる事例が増えてきました。

そのような企業活動の様子を現場に出向いて取材し、シリーズで発信しています。

今回は、株式会社リコーが、社員の環境ボランティアリーダー養成に取り組む「リコー自然教室」の現場を取材させていただきました。

自然の中に入り、実体験を通じて自然の大切さを覚え、環境に気配りする人材を育成する。

「自然教室」は、そうした人の輪を広げる大きな存在になっています。

※取材：2006年5月12～13日、事務局／真下

リコーグループが進める 生態系保全

リコーでは、地球環境にとって、生物多様性や生態系の保全が重要であるとの考えから、とりわけ生物多様性が豊かな「森林生態系」保全の推進を目的に、2つの取り組みを進めている。一つは「森林生態系保全プロジェクト」であり、環境NPOや地元住民とのパートナーシップのもとに世界各地で森林保全を展開している。もう一つの「環境ボランティアリーダー養成プログラム」は、社員一人ひとりの地球市民としての意識を啓発し、社員主体の環境ボランティア活動が地域社会に根付いて生態系保全の輪を広げていくことを推進するものである。

今回、現地取材させていただいた環境ボランティアリーダー養成プログラムの「リコー自然教室」は2005年度末、リコーグループ全体で333名が研修を受講、巣立ったリーダーたちが自主的に行ったボランティア活動は、昨年度83件を数え、延べ参加者数は2300人にも及んでいる。グループ各社や事業所でも地元の森や里山で積極的な活動を行っており、その活動数は05年度に188件にも上る。

自主的な活動を支えているこの養成プログラムは、「自然教室・初級編」と、そのフォロー

研修となる「全社会議」、さらにレベルアップして環境ファシリテーターを目指す「自然教室・中級編」、そして森林保全の専門知識や技術を持つ人材を育てる「森の教室」(長野県黒姫のC.W.ニコル財団「アファンの森」での研修)とつながり、初歩から上級まで環境ボランティアリーダーを養成する仕組みが整えられている。

第21回「リコー自然教室・初級編」の現場へ

大分県日田といえば、天領として栄えた風光明媚な山あいの街である。ここからさらに山奥へ車で1時間走ると、筑後川源流域の中津江村に入り、かつて東洋一の産金量を誇った銅生金山に着く。中津江村はサッカーのワールドカップで来日した、カメルーン・ナショナルチームのベースキャンプになったことで全国に知られるようになった。このキャンプ施設と、金山誕生とも由縁の深い田島山業(株)の山林現場で、第21回「リコー自然教室」が行われた。研修には、九州地区のリコーグループ各社から選ばれた18名が参加して開催された。

「自然教室」のプログラムは、森づくりの実体験をしながら、自然の仕組みを五感から学ぶとともに、地球環境問題や生物多様性の保

全、企業が環境保全を行うことの必要性、自主的なボランティア活動のあり方とリーダーとしての心構え、先輩リーダーたちの活動事例の紹介など、豊富なメニューのもとで行われた。



大分県日田市の中津江村

森づくり作業から体得する ボランティア精神

研修者にとって最も印象的だったのが森の中での実体験。通常自然教室は里山での活動体験が多いようだが、今回の現場は下草や灌木、蔓が生い茂る中、急峻な山での森づくり作業で、いきなり自然との触れ合いを強烈に体感する。足場の悪い山中で、スギやヒノキの枝打ち作業にとまどいながらも、黙々と体を

動かす。初めて森の中をごそごそ這い回ったという女性は、これまた初めて使うノコギリに四苦八苦し、必死に蔓を払い除け、枝を切り落とす。数時間前に初めて出会った研修者たちだが、いつの間にか声を掛け合い、助け合って、効率よく作業を進めていく。コミュニケーションの向上を、などと言われなくとも、自然の中での仕事から人の和が生まれ、連帯感が生まれる。企業の、そしてボランティア活動のリーダーとしての資質が自ずと備わっていく場面だ。



スギの輪切り円盤を手に、枝打ち作業の仕方と無節木材について説明を受ける。



枝打ち作業の実体験。初めて森の雑灌木の中を歩き、ノコギリを握ったという。

自然教室に協力していただいた田島山業の田島信太郎社長は、「木を植え森を育てても、山林経営だけで生活できるという期待感はない。けれども、今もお森を育て続けているんですね。皆さんに山に来てもらうことが一番うれしい。そこから森林と林業を改めて評価してもらえれば、林業家にとってそれほど有り難いことはない」と、飾り気なく昨今の林業事情を



森の中で研修者に語りかける田島山業(株)田島信太郎社長。同社は、中津江村一帯で1000ha規模の山林を経営。森林教育にも熱心で、YMCAの学生を毎年山に迎え入れたり、地元小学生に「教育の森」として環境啓発活動を行っている。

語る。また、何度も「今日この山に来て楽しかった人は？」と研修者に尋ねる言葉には、その想いが強く滲んでいた。

森の中での瞑想

作業を終えて、森の中で瞑想する時間が与えられた。数分間の沈黙は、山の中に漂うグリーン・シャワーを一層引き寄せる。静かな森でありながら、自然の営む音が賑やかなほどに聞こえてくる。沢のせせらぎや鳥の鳴き声など、森の響きが鮮明に聞こえるから不思議だ。心が静められたという人。生き物の気配を感じた人。幽かな森の音を聞くうちに自分が遠くへ行ったようになったという人。自然は、森は、発想を豊かにしてくれる。人間が自然の中で生きていくとを感じる瞬間だ。まさにフィトンチッドによるセラピー効果だといえよう。瞑想に耽るうち、ある一節を思い起こした。“山は静かにして情を養い、河は動いて情を慰む”。

先輩リーダーに学ぶ自主的活動

大分リコー(株)日田営業所の藤島さんは、この「自然教室」で目覚めて以来、ボランティア活動を続け、今では地元の九州森林管理局国有林の森林監視員の資格も得た。リコー計器(株)の坂本さんは、地元佐賀で米づくりをしながら、消防団など地域社会に貢献。趣味の昆虫観察を活かし、クワガタムシを育てる講座を開くといった活動も行っている。

先輩リーダーたちは、“自主的なボランティア活動を始める時は、まず現場に行って自分の目で確かめること、地元の活動に参加して見ること、他の団体NPOともつながりを持つこと、そして家族も連れて行き自分の活動を理解してもらうことだ”と、的確な助言を披露。自然教室の先輩たちの活動ぶりが如実に伝わってくる。

環境ボランティアへの抱負を語る

最後に、研修者たちが、これから環境ボランティアとして活動する抱負を発表した。マンドリン演奏を通じて子どもや老人の施設でボラ

ンティア活動をしてきた研修者の一人は、施設を回っているうちに演奏させてもらうのが楽しく、有り難いと思うようになった。環境ボランティアも社会貢献というより、“活動をさせてもらってありがとう”と言えるようになりたいと語る。また、やがては“環境の伝道師”として世界各地に赴いてみたいと大きな夢を描く人、地元の清掃活動にもっと力を注ぎたいという人など、将来への想いを全員が熱く語った。中津江村での第21回自然教室は、環境リーダーとして巣立つにふさわしい研鑽の場になったことは間違いない。



これからの自主的ボランティア活動についてグループ討議。

リコーグループの環境経営を支える「自然教室」

自然教室修了者には、環境ボランティアリーダー認定証が手渡されたが、このプログラムを推進する社会環境本部環境コミュニケーション推進室の益子晴光室長は「自然の大切さに気づき、自然に対して自分たちは何ができるかを考えてもらいたい。地域や業務の中で、それに配慮した環境行動の第一歩が自主的に始まることを期待します」と述べた。

まさに「自然教室」は、リコーの経営方針にある「環境保全活動を通じて新たな経済価値を創出する」企業としての、人づくりの源泉になっている。



研修者に環境ボランティアリーダー認定証が手渡された。



公益信託 日本経団連自然保護基金

Keidanren Nature Conservation Fund

日本経団連自然保護協議会

KNCF *Nippon Keidanren Committee on Nature Conservation*

日本経団連自然保護協議会

会 長：大久保尚武

事務局：〒100-8188 東京都千代田区大手町1-9-4 経団連会館6階

TEL.03(5204)1697 FAX.03(5255)6367

URL <http://www.keidanren.or.jp/kncf/>

